

## 確かな学力を身に付ける子どもの育成

～ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり～

### 1. 主題設定の理由

#### (1) 今日の教育の動向から

これからの変化の激しい社会においては、学校で学んだ知識のみで社会生活を営むのではなく、子ども達一人一人が自ら個性を発揮し、困難な場面に立ち向かい、未来を切り拓いていく力が求められている。このために必要となるのは、自ら学び自ら考える力などの「確かな学力」、他人を思いやる心や感動する心などの「豊かな人間性」、たくましく生きるための「健やかな体」などの「生きる力」であるといわれている。しかし、「確かな学力」において現在の子供達達は、論理的思考力や問題発見力、行動力・実行力、学ぶ意欲や判断力、表現力に課題があるといわれている。また、通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果（文部科学省・平成24年12月）では、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒が、小・中学校の通常の学級に約6.5%在籍していることが報告されている。さらに、これらの児童生徒以外にも、教育的支援を必要としている児童生徒が在籍していることが示されている。

これらのことから本校では、子どもたち一人一人に応じた指導をするなどユニバーサルデザインの視点を生かした授業を通して、「わかった・できた授業」を行っていく必要があると考える。そこで、さまざまな特性や課題がある子どもたち一人一人が意欲的に学習に参加し、問題解決型の授業を行っていけば、子どもたちは主体的に学ぶことができ、確かな学力を身に付けることができると考え、本主題を設定した。

#### (2) 本校児童の実態及び本校のめざす授業像から

本校の児童は、明るく素直な子ども達である。前年度までの研修の成果として、『学び合い』など協同的な学習の研修の積み上げの中で、子ども達が「みんなでわかる・みんながわかる・ひとりもみすてない」と学習が分かるようになりたいと意欲的に取り組む子どもも多い。しかし、令和元年度久留米市学力検査において、評定1の割合が、国語科では23.8%、算数科では32.2%である。このことから全ての子ども達に基礎・基本の確実な定着が図られていない結果がうかがえる。そこで、本校ではめざす授業像として「子ども主体の問題解決的な学習を通して、子ども達が「わかった・できた」という達成感、満足感を味わう授業」「書く活動による学習ノートの充実を通して、子どもが自分の考えをつくり表現できる授業」「対話による相互作用によって、互いの考えが広がり、深まる学び合いのある授業」を掲げ、全職員で取り組む確認をしている。これらのことからもすべての子ども達に確かな学力を身に付けさせるために、ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりをしていくことは意義深いと考える。

#### (3) 本校の研究の経緯から

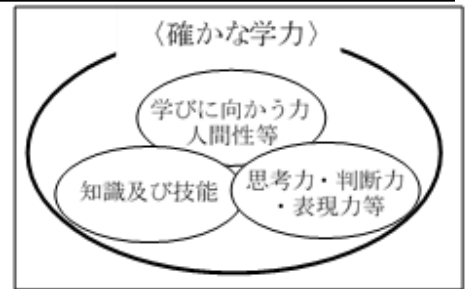
令和元年度は、「確かな学力を身に付ける子どもの育成～深める場における交流活動の工夫～」を研究主題として研究を進めた。深める場での学習形態を、ペアから班、全体や、班から全体、個人から全体と学習内容や児童の実態に応じて、さまざまなバリエーションで行われたことは、学習内容を理解する上で有効であったと考える。しかし、すべての子どもが学習に参加し、学習内容を理解できたのかについては課題が残る。そこで、本年度も引き続き「確かな学力を身に付ける子どもの育成」を研究主題とし、副主題を「ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり」として研究を進めていくこととした。

## 2. 主題の意味

### (1) 「確かな学力」とは

「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの資質・能力をバランスよく身に付けることである。

確かな学力とは、知識及び技能だけを身に付けるのではなく、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うことであると考えられる。このように、どれか一つだけの資質・能力を育てるのではなく、3つの資質・能力のつながりを考えながら、バランスよく身に付けていくことが確かな学力を身に付けていると考える（資料1）。そして、3つの資質・能力とは下記のようなことである。（資料2）



〈資料1 確かな学力とは〉

「知識及び技能」・・・何を理解しているか、何ができるか

「思考力、判断力、表現力等」・・・理解していること・できることをどう使うか

「学びに向かう力、人間性等」・・・どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか

〈資料2 3つの資質・能力〉

### (2) 「確かな学力を身に付ける子ども」とは

子ども主体の問題解決的な学習を通して、①学習の課題をもつ②見通しをもつ③自分の考えをつくり交流し、学習のまとめが書ける④学習のふりかえりができることで基礎・基本を確実に身に付ける子どものことである。

まず、明確な課題をもつとは、前時と本時のズレや生活上での疑問などから、自分に合った課題をもつことである。さらに、授業始めと終わりの自分を比較することで、本時の成果と課題がわかり、自分の伸びが実感できるとともに、次への意欲にもつなげることができる。と考える。

次に、見通しをもつとは、本時学習の内容をとらえ、どんな方法で、どんな結果になるかを考えることである。内容、方法、結果から見通しをもつことで、次の自分の考えをつくる活動につなげることができる。

そして、自分の考えをつくり友達にわかりやすく伝えるとは、考えを言葉だけで伝えるのではなく、図、表、言葉、矢印、式等を使って視覚的に考えをつくり、友達に自分の考えを書いたノート等を見せながら説明することである。自分の考えを交流する時は、お互いの意見を発表し合い、自分の考えと比べながら共通点や相違点をみつけたり、理解できないところは質問したり、課題を解決するという目的に沿って話し合ったりする。交流活動を通して他者の考えを受け入れながら、始めにつくった自分の考えを強化したり、付加修正したり、さらには全く新しく考えをつくり上げていったりする。

最後に、まとめとふりかえりをすると、友達と本時学習で「わかったこと」や「できたこと」を交流することでまとめをつくることである。そして、「なぜ分かるようになったか」や「次の学習にどう使うか」等、具体的なふりかえりを書くことでもある。学習の結果だけでなく、学習の過程をふり返ることで、自分の学びのよさが実感でき、次時への意欲にもつながると考える。

以上のような一連の思考過程を通して、自分の考えを広げたり深めたりしながら、確かな学力を身に付けていくことである。（資料3）

○自分の思いや願いから学習課題を見出すことができる子ども（課題性）

○課題解決のための見通しをもつことができる子ども（思考性）

○自分の考えをつくり、友達にわかりやすく伝えることができる子ども（実現性）

○自他と交流することで、まとめとふりかえりができる子ども（実感性）

〈資料3 めざす子どもの姿〉

### 3. 副主題の意味

#### (1)「ユニバーサルデザインの視点」とは

みんなが学習に参加できるように、「シンプル」「クリア」「ビジュアル」「シェア」の4つの視点を与えることである。

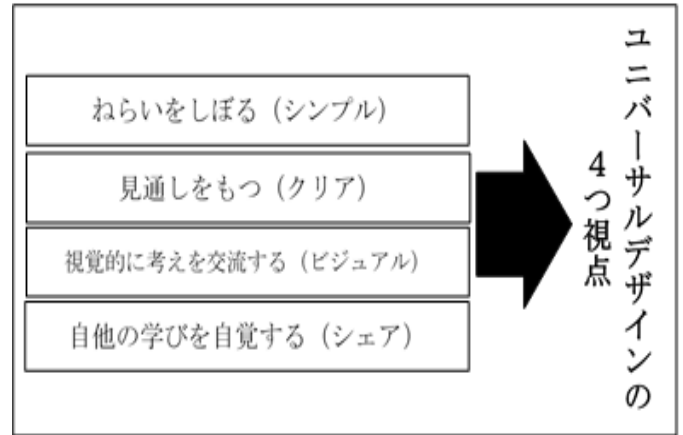
本研究におけるユニバーサルデザインの4つの視点(資料4)とは、下記のようなことである。

「シンプル」とは、本時のねらいやめあて、発問、児童生徒に提示する情報を絞り、児童生徒が意識や思考を焦点化しながら学習活動に取り組むことができるようにすること。

「クリア」とは、授業展開の道筋を明確にし、児童生徒が授業全体を見通しながら段階的に学習内容についての理解を深めていけるようにすること。

「ビジュアル」とは、思考や言語などの情報を、絵や写真、図、動作などに変換し、視覚的に提示すること。

「シェア」とは、意図的にペアやグループなどで話し合う場を位置づけ、全ての児童生徒が発言する機会を保障したり、児童生徒の発言に対して教師が切り返しや補足説明、意味付けをしたりしながら理解を促すこと。



〈資料4 4つの視点〉

#### (2)「ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり」とは

みんなが学習に参加し、学習内容を理解するために、1単位時間の各段階にユニバーサルデザインの4つの視点を位置づけた授業のことである。

本研究では、1単位時間を「つかむ」「つくる」「ふかめる」「ふりかえる」の4段階に分け、各段階にユニバーサルデザインの4つの視点を位置づけて授業を行う。各段階のねらいを下記のようにする。

段階	視点	目的	めざす子どもの姿
つかむ	シンプル	○課題意識をもち、本時の明確なめあてをもたせる。	課題性
つくる	クリア	○学習の内容、方法、結果等の見通しをもたせる。	創造性
ふかめる	ビジュアル	○図、表、矢印、式等を使って視覚的に考えをかき、友達に伝える。	表現性
ふりかえる	シェア	○本時の成果と課題を明確にし、次時につなげる。	実感性

### 4. 研究の目標

日常の学習指導の充実を目指す方途から、確かな学力を身に付ける子どもを育成するために、ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりの有効性を究明する。

### 5. 研究の仮説

日常の学習指導において、すべての子ども達にとって、楽しく「わかる・できる」授業が成り立つように、以下の4つの手立てをもって、ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりをすれば、確かな学力を身に付ける子どもを育成することができるであろう。

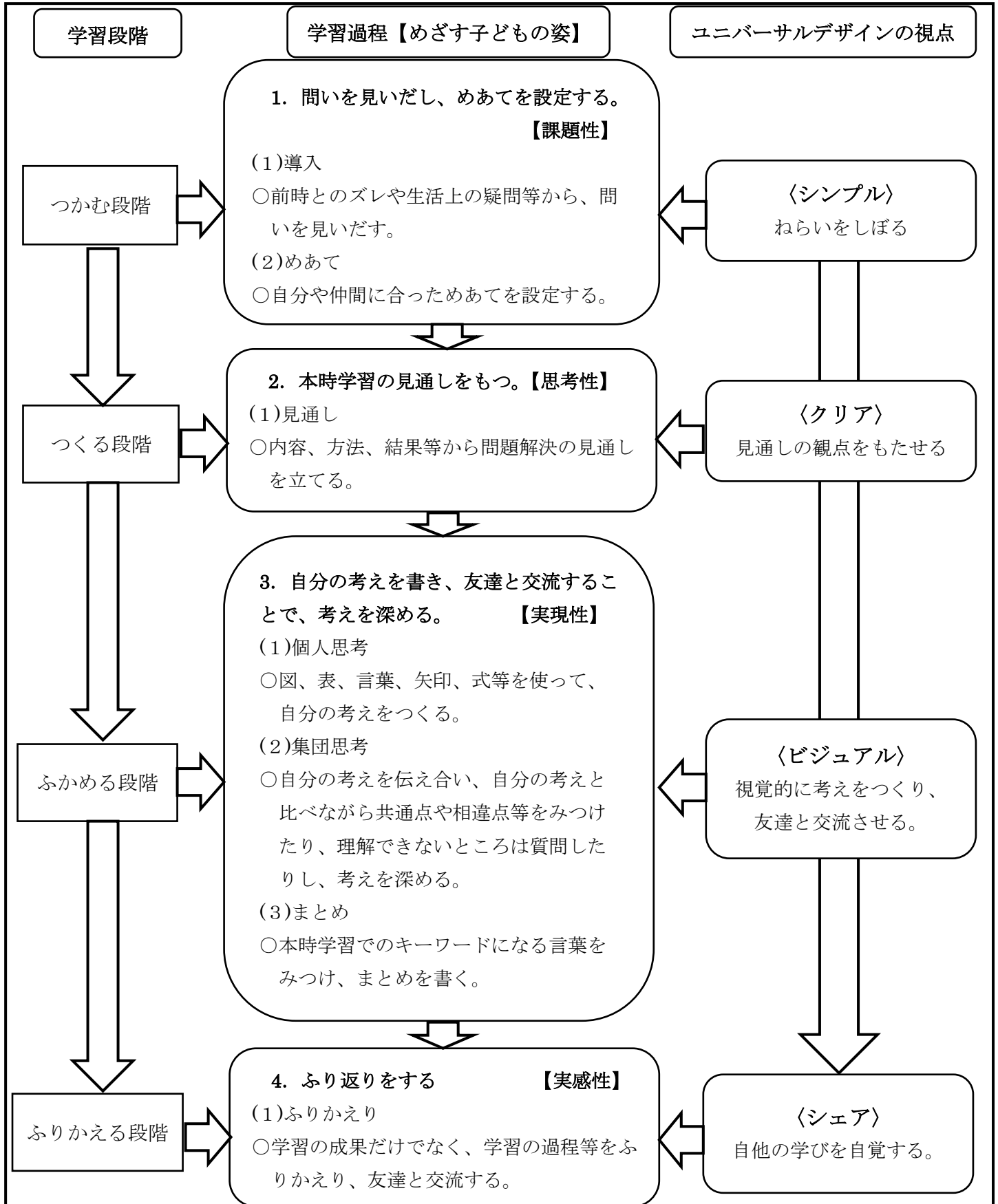
- ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり
- 自分の考えを書く活動の工夫

- 子ども主体の学習過程と発問の工夫
- 教室環境づくり

## 6. 研究の具体的構想

### (1) ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり

本研究においては、1単位時間を4段階に設定し、3つの資質能力をバランスよく身に付けていくようにしていく。そのためには、基本的な問題解決活動の過程を踏まえた学習段階や、課題を把握し追求していきけるようにユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりをしていく必要があると考える。そこで、本研究では、1単位時間を下記のような授業の流れで行っていく。



## (2) 学習過程と発問の工夫

各段階の活動を明確にし、3つの資質能力をバランスよく身に付けていけるようにする。そのために、本研究では、子どもたちの思考を促すために下記のような発問の工夫を行う。

段階	活動	発問	めざす子どもの姿
つかむ	1. 問いを見だし、めあてを設定する活動	(1)既習のズレ、考えのズレを意識させる発問 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「前の学習と比べてみてどう思う？」</li> <li>・「どれが正しい？」</li> </ul> (2)自分で「めあて」を考えさせる発問 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「今日はどんな「めあて」で学習したいですか？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「なぜだろう」</li> <li>・「どうなっているのかな」</li> <li>・「どうしたらいいのかな」</li> <li>・「今日はこんな「めあて」で学習したいな」</li> <li>・「こんな疑問を解決したいな」</li> </ul>
つくる	2. 本時学習の見通しをもつ活動	(1)視点を明確にする発問 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「何に目をつけて考えると解決できそうかな？」</li> <li>・「どんな方法で解決できるかな？」</li> <li>・「既習が生かせるかな？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「たぶんこうだと思う、なぜなら・・・」</li> <li>・「きっとこうすればいいと思う、なぜなら・・・」</li> </ul>
ふかめる	3. 自分の考えを書き、友達と交流することで、考えを深める活動	(1)「主張○」「根拠□」「理由△」を意識させる問い返し <ul style="list-style-type: none"> <li>・「どうして○と考えたの？」</li> <li>・「どうして□からそう言えるの？」</li> </ul> (2)-1 交流を機能させるコーディネート <ul style="list-style-type: none"> <li>・「◎さんの考えに質問はないかな？」</li> <li>・「◎さんと同じ考えの人はいるかな？」</li> <li>・「◎さんの考えをだれか代わりに説明できるかな？」</li> </ul> (2)-2 視点を変えて考えさせる発問 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「こんな考えの人もいたけどどう思う？」</li> <li>・「もし～だったらどうなるかな？」</li> <li>・「こんな考えではいけないかな？」</li> </ul> (3)自分で「まとめ」を考えさせる発問 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「今日の学習で大切な言葉は何かな？」</li> <li>・「今日のまとめを◇という言葉を使って書いてごらん？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「わたしは○だと思います、なぜなら□から△だと考えられるからです」</li> <li>・「◎さんはこう考えたのだと思います。」</li> <li>・「◎さんの考えに賛成です、なぜなら・・・」</li> <li>・「◎さんの考えを聞いて考えが変わりました、なぜなら・・・」</li> <li>・「◇という言葉を使ってまとめを考えかいている姿」</li> </ul>
ふりかえる	3. ふりかえりをする活動	(1)振り返りの視点の提示 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「今日何がわかった？」</li> <li>・「どうやったらわかった？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「今日の学習でこんなことがわかりました」</li> <li>・「こんな方法で解決できました。」</li> <li>・「学習前にはできなかったことができるようになりました」</li> </ul>

### (3) 自分の考えを書く活動の工夫

論理的思考力の育成は「書くこと」が中心となる。つまり、「書くこと」は、思考力、判断力、表現力等の育成において特に重視すべき言語活動であると考え。そこで、本研究では、書く活動において次のような工夫をする。

	つかむ	つくる	ふかめる	ふりかえる
目的	○本時学習のめあてを書く。	○学習の見通しを書く。	○自分の考えを整理して書く。	○学習の成果と課題を書く。
内容	○前時とのズレや疑問から本時学習に合っためあてを書く。	○内容、方法、結果等の視点から、学習の見通しを書く。	○自分にも友達にもわかりやすく図、表、グラフ等を使って自分の考えを書く。	○本時学習でのわかったことやなぜわかるようになったかを書く。
方法	○前時と本時の課題を提示する。 ○キーワードになる言葉を考えさせる。	○内容、方法、結果等の視点を与える。	○説明に必要な情報や資料を与える。 ○番号や矢印を使って考えを整理させる。	○わかったことからキーワードになる言葉を見つける。 ○ふりかえりを書く観点を与える。

### (4) 教室環境づくり

周囲の刺激に反応してしまい注意集中が途切れやすい等の困難を示す児童生徒がいる場合は、物的環境や人的環境による刺激量についての配慮を行うとともに、児童生徒が行うべき行動をルールとして明確に示すことが重要になる。そして、このことは、困難を示す児童生徒だけでなく全ての児童生徒が授業によりよく参加する上で重要な授業づくりの基盤でもあると考える。

項	目
①	提示物は、シンプルにしている。特に教室前面や前面黑板には、余分な提示をしていない。
②	教室の棚など、学習用具の整理整頓に努めている。また、所定の場所が決められている。
③	黑板は、常にきれいである。(黑板が白く汚れて、文字のコントラストが弱まることはない。)
④	身の回りの物音や声等、雑音が少なくなるように配慮している。
⑤	「学習のきまり」(発表の仕方、学び方等)を提示し、活用している。
⑥	児童生徒の実態(見え方や聞こえ方、注意集中等)に応じて、座席の位置を配慮している。
⑦	自己選択・自己決定の機会の設定など、児童生徒自身の行動に責任を持たせる工夫をしている。
⑧	全ての児童生徒が認められる場を意図的に設定している。また、具体例をあげながら褒めるようにしている。
⑨	児童生徒がエネルギーを発散させる場を作っている。あるいは、行動を生産的な活動につなげるようにしている。
⑩	児童生徒が共同の目標に向かって役割を分担し、互いに協力して実践する活動(係活動や学級会等)に取り組んでいる。

7. 研究構想図

